

トランペット吹奏技術の古典派期衰退論再考

——廃絶と発展の二論に向けて——

石原 慎司

ナチュラル・トランペットの歴史に関するこれまでの定説において、古典派時代のトランペットの吹奏技術は「衰退」した、つまり、下手になったとされてきた。さらに、この見解の結果として古典派後期の奏者の音楽的役割までもが否定的に語られてもいるのである。これらの見解の根拠はバロック時代のクラリーノ（トランペットの高音域）の楽器法と古典派後期の第 12 倍音以下の低い音域に限られた楽器法との比較によるようである。しかし、古典派の楽器法は、ティンパニと連動してアンサンブル全体を支える役割であることから、バロック時代のプリンツィパル（クラリーノの下の音域）の楽器法に由来すると思われる。従って、クラリーノの吹奏技術の衰退結果として古典派の音域に至ったのではなく、古典派のオーケストラの中ではプリンツィパルの技術が以前にも増して重要な役割を果たし、発展したと理解できるのである。尤もバロック時代からマウスピースや楽器本体が高音用と低音用に大きく分かれており、プリンツィパルであっても専門性やその技術は高く評価されてもいたので、否定的な評価は全く相応しくなかったのである。

クラリーノ奏法・奏者・音楽がなぜなくなったのかについては、神聖ローマ帝国の中心たるオーストリアが 18 世紀半ばに国家の近代化のために行政改革の中で音楽的トランペット奏者のリストラを強行したことに直接的原因があると筆者は考える。クラリーノ文化は王侯が政治的目的、宣伝的目的のために保護・育成してきたものだからである。従ってクラリーノの吹奏技術は 1780 年頃を境に、一定の水準を保ちながらクラリーノ奏者の死亡・引退等による自然消滅の形で「廃絶」したと考えられる。王の食卓等で演奏されたトランペット・ソナタ等が全く別物のハルモニー・ムジークに曲種交代したと思われる点は、「廃絶」という見方を補足している。